HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小規模の部活動における活動形成の論理 : 北海道の高校サッカー部での参与観察をもとに [全文の要約]
Author(s)	魚住, 智広
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第13974号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78682
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Tomohiro_Uozumi_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士論文の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：魚住智広

学位論文題目

小規模の部活動における活動形成の論理：
北海道の高校サッカー部での参与観察をもとに

本研究は、小規模の部活動における生徒たちの活動形成について論じるものである。北海道は 2000 年以降、もっとも急速に高校が減少、縮小化している都道府県の一つである。この傾向は部活動にも大きな影響を与えていると考えられるが、学校や教員があらゆる手を尽くして部活動を存続させるとは限らない。そのため、部活動の存廃が問われるとき、チームを維持したり、日々の活動を形成したりする主体として、生徒たちが担がれる可能性がある。そこで本稿では、彼らにとって小規模の部活動での活動は、何者かによって与えられるものではなく、自らの手で形成しつづけなくてはならないものであると捉え、約 3 年間の参与観察をもとに、生徒たちが日々の活動を形成するプロセスを追った。

調査を実施したのは、都市圏郊外にある公立 A 高校サッカー部である。A 高校は生徒数の減少に加えてもとより部活動が盛んとは言えず、サッカー部の部員数もときに 11 人を下回っていた。本稿では、この国の部活動の行く末として位置づけることもできるこの小規模の部活動で調査し、大会に出場することもままならないような部活動において、生徒たちはどのように楽しみを見いだしているのかという問いについて検討することを試みた。

なお先行研究は、今日の過熱する部活動が「競争の論理」によって運営されていることを問題視し、部活動での「総量規制」を実施し、「居場所の論理」に移行すべきだと論じた（内田, 2017）。だが A 高校サッカー部の生徒たちは、むしろ「過冷」に苦悩しており、規制すべき活動も存在しなかった。そのため本稿では、「部活動をどのような空間にすべきか」という従来の議論から離れ、「部活動で生徒たちが実際に何をしているのか」について記述することで、生徒たちがどのような論理にもとづいて活動を形成しているのかを描くことを最終的な目標とした。

第 2 章では、先行研究が部活動の重要な意義とする「機会保障」の観点から、小規模の部活動で獲得しうるスポーツの機会の現状を把握することを目指した。これは、小さ

な部活動に所属する生徒たちがマスメディアなどに報じられるとき、その悲劇性ばかりにスポットライトが当たり、彼らがどのようなスポーツの機会を得ることができるのかが不透明なままだからである。

まず、日々の練習のなかで生徒たちが向き合わなくてはならなかったのが練習メニューの規定化である。小規模の部活動ではメニューによって練習に参加する人数を決めるのではなく、出席している人数をもとにメニューを決める必要があった。そのため、生徒たちが実施できる練習メニューは非常に限定されていた。また生徒たちは紅白戦を行うことができなかった。そのため実戦形式のトレーニングは練習試合に依存していた。だが、彼らの高校のある地域では対外試合がほとんど行われない。したがって、対外試合のために都市部まで移動しなければならず、高校生にとっては経済的にも身体的にも大きな負担となった。

さらに、生徒たちは公式試合への参加も断念していた。今日、日本サッカー界は、多くの試合出場機会を重ねることで、常に目標をブラッシュアップしながら活動することを推奨している。これは M-T-M（Match-Training-Match）と呼ばれ、この方針によって具現化されたのがリーグ戦方式の大会である。だが実際には、A 高校をはじめとして多くの高校サッカー部がリーグ戦方式の大会参加を断念していた。重要なのは、単に試合数を多くこなすことによる身体的負担だけでなく、大会参加の条件となる審判業務や会場設営が小規模の部活動の生徒たちにとって大きな負担となり、参加を断念していたことである。したがって彼らは、日本サッカー界が理想とする「築き上げる」活動を進めるにあたり不可欠なスポーツの機会から疎外されていたと言える。

第 3 章と第 4 章では、生徒たちが向き合わなくてはならない学校や部の内部で生じる問題を取り上げた。まず第 3 章で扱ったのは、小規模の部活動だからこそ問題となった生徒の欠席や出席状況のばらつきである。たとえば、彼らの欠席はたとえ 1 人であっても活動の成否に大きな影響を与えた。そこで生徒たちは、活動を成立させるために SNS を用いたルールを定め、出席する人数を事前に把握できるよう試みた。だがこのルールはすぐに形骸化してしまい、彼らは一転してあらゆる出席状況を放任しはじめた。部員数が 11 人を下回ることも多々あったが、生徒たちは部から離れていく生徒を無理に引き止めることはなかった。

第 4 章では、第 3 章で述べた部活動の状態のなかで、生徒たちがさまざまなプレイヤーとどのように共に活動しているのかについて事例を取り上げた。たとえば、生徒たちは「自分に厳しく他人に優しい」ダブルスタンダード的な自律性を内面化することで、部活動へのさまざまな出席状況を許容していた。部活動に積極的な生徒たちは部員の減少にあわせて活動場所を体育館へと移しフットサル活動もしてきた。生徒たちはサッカ

ーを断念してフットサルへと競技を変えることをも厭わず、目前のスポーツの機会に「沿って進む」活動を重視してきた。これは日本サッカー界が理想とする「築き上げる」活動とは対照的な活動方針であった。

また彼らの活動には、競技歴、競技力、年齢、所属など、さまざまなプレイヤーが参加し、生徒たちもこの混在を必要とする関係にあった。だが生徒たちは、部活動を存続させるために、誰かれ構わずプレイヤーを必要としているわけではなかった。部活動が盛んではない A 高校のなかで、サッカー部はもっとも熱心に活動している部活動の一つであった。そのためサッカー部に参加するには、部員と同じような熱量が必要となり、ときには元部員であってもグラウンドに入ることが憚られる空気感を放った。また、生徒たちはスポーツの勝負を決して度外視しておらず、むしろ勝負にこだわる部活動を欲するがゆえに、長期的な目標を設定することすらできない部活動に限界を感じるときもあった。

これらの事例をもとに第 5 章では、生徒たちが「築き上げる」活動ではなく、「沿って進む」活動に向かったことを出発点に、本稿の問いについて検討した。まず生徒たちが作り上げた部活動は、競争の場／居場所としての部活動には当てはまらないことを述べた。さらに生徒たちが「沿って進む」活動に向かった結果、活動の予測不可能性と勝利の予測不可能性という 2 つの予測不可能性を乗り越えることができたことを論じた。

そして、この 2 つの予測不可能性の克服を、M. Csikszentmihalyi のフローのモデルに当てはめることで、スポーツをプレイすることで生じる源泉的な楽しみを享受しようとする生徒たちの活動形成の論理を描くことを試み、これを「プレイの論理」と呼んだ。なお本稿では、理想化される「築き上げる」活動と現実化した「沿って進む」活動をフローのモデルへ挿入することで、部活動の小規模化のもっとも大きな問題として、生徒たちがスポーツのなかで得ることのできる楽しみの領域の狭小化や、生徒たちがスポーツの楽しみを得るためにそもそもスポーツの機会を得ることができるのかという別軸の課題と向き合わなくてはならないことを示した。